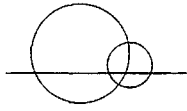


〈東亜同文書院大学記念センター公開講演会〉



東亜同文書院大学の教育、とくに中国語教育について

東亜同文書院大学 第41期 宮田一郎

【司会】 それでは定刻となりましたので、ただいまより東亜同文書院大学記念センター公開講演会を開催いたします。まず初めに東亜同文書院大学記念センター長の藤田佳久教授よりご挨拶がございます。よろしくお願いいたします。

【藤田】 皆さんこんにちは。朝方雨で、今日はどうなるかなとちょっと心配しましたがけれども急に良い天気になりまして、夏らしい1日になって参りました。土曜日の午後、この会のためにたくさんの方にお集まりいただきまして大変ありがとうございます。

ご承知のように我々の東亜同文書院大学記念センターは、文科省のプロジェクトの支援を受けて今年で4年目に入りました。5年間のプロジェクトですが、毎年いろんな行事をやっております。そのうちの1つに今日のこういうような東亜同文書院関係の講演会を行なうというのがございます。毎年ずっと進めて参りました。表のほうに今年の我々の年報が出ています。ちょっと厚くて重たいんですけども、もしご希望の方があれば手にとっていただきますと、昨年の分のいろんな行事の記録が細かく載っておりますので、ご参考にしていただけたらと思っております。

今年度は本日進行をさせていただきます今泉先生にお世話をいただきまして、ここにお名前が載っています宮田一郎先生、東亜同文書院大学第41期の卒業生の先生ですが、文字通り中国語の

いろんな方言を含めてずいぶんたくさんマスターされました。メディアのほうでもご活躍の先生です。その宮田先生の目を通して、宮田先生のその後の人生にも関わると言うんですけれども、中国語教育にずっと専念されて、中国でも日本と中国をつなぐ重要な役割を、語学を通じて果たしてこられました。昨日の夜少しお話をするチャンスがありまして、私も先生のお話の中に出てくる情報が非常に新鮮で、頭の中にどれだけ入るかなというぐらい満杯になってしまいました。

そういう点で今日あらためて「東亜同文書院大学の教育、とくに中国語教育について」というお話をいただくということで、楽しみにしております。どうぞ皆さんも最後までゆっくりご清聴いただければ大変ありがたいというふうに思っております。ということで簡単ですが私のご挨拶とさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

【司会】 ありがとうございます。続きまして今泉潤太郎客員研究員より、講師宮田一郎先生のご紹介がございます。

【今泉】 皆さんこんにちは。宮田先生はご案内のように1923年（大正12年）福井市にお生まれになり、県費生として同文書院に入学されます。学徒出陣で応召。終戦により現地除隊。帰国後は福井県で県庁あるいは県立高校などに勤務されまし

て、中国語学の研究をご自身で進められます。その後福井大学で中国語を教え、後に大阪市立大学で教授として中国語教育に携わられ、その後も大東文化大学、京都外国語大学、北陸大学などで教授を歴任されます。この間8年にわたってNHKでテレビ、ラジオ中国語講座の講師を担当されておられます。著書については非常にたくさんありまして、ここに書いたのはそのごく一部ですが、私共の、愛知大学中日大辞典編纂の上でも非常にお世話になっております。ここに挙げました「漢語方言大辞典」、あるいは「明清呉語詞典」を復旦大学、蘇州大学と共同編集し、その主編者としてお仕事をされておられます。現在も両大学の顧問教授となっておられます。その他辞書もたくさんありまして、私の学生時代では、たとえば光生館から出ました「現代中国語辞典」など。その他著書も多数にのぼります。今日は中国語学の権威である宮田先生がこのテーマでお話をされますが、少し広くと言いましょうか、ここから離れて広く先生のお話を伺いたいと思います。では先生よろしくお願いいたします。

【宮田】 ただいまご紹介にあずかりました宮田一郎でございます。大変分に過ぎたご紹介の言葉が多うございまして、穴があったら入りたいと恐縮しているところでございます。ご紹介にありましたように私は東亜同文書院の41期、旧制大学でございますが大学になりましてから2回目の卒業生でございます。昭和15年（1940年）に上海に渡って入学いたしました。ちょうど17歳になったばかりの春でございまして、来年でちょうど70年ということになります。その当時学校は、もともとありました虹橋路（ホンチャオルー）の校舎が戦火によって焼失しておりましたために、内陸部に移動して空家になっていた交通大学のキャンパスを借用しておりました。交通大学は徐家匯（上海ではジカウェイと言っております）にありまして、今でも一部残っていますが、例の朱の大きな

門があるところです。交通大学はいろんな名士を生んでおり、たとえば前の主席をしました江沢民氏もこの大学の卒業生でございます。彼らにとってもあの朱の大門は非常に懐かしいものだそうですが、我々書院生にとりまして大変懐かしい、いわば青春のシンボルとも言えるべきものであります。

私たちは予科2年、学部3年の5ヶ年をそこで送るはずでございましたけれども、太平洋戦争が始まって、その戦争遂行のための兵力不足を補うためでしょうが、学生の徴兵猶予の制度が廃止になり、昭和18年の12月、いわゆる学徒出陣によって、懐かしい朱の大門を後にしまして、再び学生としてその門をくぐることはありませんでした。翌年の9月に41期生は戦時繰り上げ卒業ということになりまして、当時私は南京にありました金陵部隊という予備士官の教育隊にりましたが、私の手元にも卒業証書が送られて参りました。書院ともこれで終わりかと、寒々とした冷たい風が胸の中を吹き抜けるような思いがしたものでございます。

そういうわけで書院での生活はわずか4年にも足りないという非常に短いものでございましたけれども、しかし歳月の長さでは計れないような大きなものを書院から学びまして、これが86歳を越した今も私を支えてくれております。大変ありがたいことだとしみじみ思っている次第であります。同文書院というのは我々の学士号が商学士でありますように、いわゆる旧制の商科大学でありましたけれども、中国語教育は大きな1本の柱になっておりまして、学部に進みましても商業関係の学科、経済学関係の諸学科と並んで中国語の各教科が組まれておりました。外国語、それに哲学関係の教科を中心とする予科においては言うまでもないことでございます。学部でも「児女英雄伝」、「紅樓夢」という、中国の清朝時代の口語小説でございまして、紫式部の「源氏物語」、それからシェークスピアの諸作品に擬せられる作品、こう

いう旧小説の講読が必修になっておりました。これはちょうど商科大学あるいは商学部でシェークスピアの作品を必修にするようなものでございまして、商科大学としてはあまり類を見ないものであろうかと思えます。

書院はもともとビジネススクールから出発しているわけですが、ビジネススクール時代以来の実践的な中国語教育の中から生まれた会話テキスト「華語萃編」4巻がございまして、改訂を重ねまして高等専門学校、4年間（普通高等専門学校は3年が多いわけですが）で終わる高等専門学校の時代もこの「華語萃編」が引き継がれ、その実践的な会話を中核にしまして文法、作文、文学作品講読、古文、書簡文、方言、大旅行に備えての旅行会話などが組まれておりました。大旅行というのは、当時書院では卒業学年に数名がそれぞれ1つの班を結成し、旅行計画を自分達で自由に設計いたしまして、1か月を超えるような長い時間をかけて中国各地を旅行し調査する、そしてその結果を調査報告書として提出することになっておりました。これは先ほど開会のご挨拶をなさいました藤田先生の非常に詳しい優れて学術的なご研究がございまして、大学になりましたもほぼその態勢が引き継がれておりましたけれども、「華語萃編」だけは予科1年に第1巻、予科2年に第2巻をやるだけでありまして、第3巻、第4巻は我々の時にはもう学習することなく終わってしまいました。これは書院生の中国語の実務能力の低下を招くのではないかという危惧が一部にあり、事実その通りになったように思います。我々41期はほぼ4年書院に在学しておったわけですが、4年で卒業する制度の高等専門科時代の書院の卒業生先輩に比べまして、力の差をまざまざと見せつけられることがしばしばございました。

昭和18年に附属専門部ができて、我々は「ジカウエイ（徐家匯）」の交通大学のキャンパスを借りていたわけですが、今は非常に発

展しました上海の「プートン（浦東）」地区（国際線飛行場があるところ）に専門部ができて、先生方の中には書院中国語の伝統はこの附属専門部に賭けるというような考え方をなさっている方もおられると聞きました。大学という教育の仕組みの中で今まで書院がやってきた中国語教育の仕組みを全部受け入れるということは、やはり制度上非常に難しい点があったのではないかと思っております。

書院に入りまして中国語を初めて勉強したわけですが、一番驚いたのは、中国語の試験の方法なんです。我々はたとえば旧制中学時代、英語の試験は用紙に英語の文章が書いてございまして、それを見て訳す、それを提出するという方法でございましたけれども、書院の中国語の試験の方法はそうではなく、白い紙1枚を渡されるわけです。中国人の先生が入ってこられて、**「ティーイータオ（第一道）」**、**「タオ」**とは**「道」**という字を書きますが、試験問題などを数える助数詞です。**「ティーイータオ」**、**「ティーアルタオ（第二道）」**という具合に読み上げられて、耳で聴いたのをそのまま日本語に訳していくというやり方でございました。そして全問が終わりますともう点検する暇もなく、音で聴くのですから点検のしようもないわけですが、すぐ回収をするというようなやり方でございまして、一切漢字を介しておりませんでした。これには大変驚いたものです。我々は読む英語教育で育ってきておりますから、外国語を聴く力で測るというやり方は、大変新鮮ではありましたが、最初の頃は非常にとまどいました。

それから出題の中の単語はテキストに出てくる単語が主でありますけれども、それが全部ではないんですね。その語に関連して先生がお話しになった単語・語句なども入っておりまして、授業をさぼるのを許さないようになっていたと思っております。学校では「華語月刊」という中国語の学習雑誌（その資料は東亜同文書院大学記念セン

ターに残っております)に時々その出題と解説が載っておりまして、我々も試験対策を兼ねてよく読んでおりましたけれども、同文書院のこの試験方法をご存じでない方は、「何だ、書院ともあろうところがこんな易しい問題でテストをしているのか」と思われたということを聞いております。漢字で見れば何でもないのであることが、耳ではなかなか聴き取れないということがたくさんあります。私も幾つか記憶がありますが、1つ挙げますと、予科1年の学年末の試験に出た単語があります。それは「クイ・チョン・チイ・チェン・ダトンシ」。「クイ・チョン」は「貴重」と書きます。「チイ」というのは「値する」ということです。「チェン」は「銭」です。「トンシ」は「東西」と書いてこれは「物」ということです。「ダ(的)」というの「〜の」ということですね。「クイ・チョン・チイ・チェン・ダトンシ」、「高価な貴重品」ということですが、「チイ・チェン(値銭)」というの、中国語をされる方はすぐお分かりと思いますが、「チイ(値)」も2声、「チェン(銭)」も2声。としますと前の2声は半分しか上がらないんです。「シエシエ(謝謝)」というの皆さんご存じですね。「シエ」というのは4声で、5から1まで下がる言葉です。ところが「シエシエ」と4声が2つ続く場合には、最初のものは半分しか下へ落ちないんですね。それと同じように「チイ・チェン(値銭)」は「チイ(値)」というのが途中までしか上がりませんから、その頃の私はそれを聴き分けられない。1声にどうしても聴いてしまうんですね。そうすると1声で「チイ」という音は「之」という字です。それしか頭に浮かびません。とうとういろいろ考えてもできなくて、1問ファイにしてしまいました。非常に情けなくて、その頃若いせいもありましたけれども、悔しくてその晩は寝つかれなかったような、今から思えば滑稽な思い出がございます。

このように、「聴く」ということを非常に重んじていたわけですが、その理由だけでは

ないと思いますけれども、今から思いますと私たち、と言うよりも私は、「読む」力はやはり欠けていたという感じがしております。私たちが予科を終えて学部に入る時に外国語学校、戦後学校の制度が変わりまして、「外国語大学」になるのですが、その「外国語学校」のシナ語科を卒業した人が学部に編入して参りました。そして我々のクラスに入ってきたわけですが、「読む」という力では私はやっぱり彼等に譲るところがあったように思っております。

私は長らく自分の生まれ故郷で高校教師をした後に、大学の中国語教師になったわけですが、大学教員になって初めて学会に行き、この愛知大学の中国語の基礎を作られました鈴木擇郎先生、書院時代にお習いした恩師でございますが、鈴木擇郎先生にお会いした時に、「日本の学校は、1つ1つの字の意味・用法を詳しく突き詰めていく訓詁学の伝統があって、文学作品を読む場合には1つ1つの単語の用法を歴史的に押さえながら読んでいくから、その点はよく注意して教えるように」ということを言われました。おそらく鈴木先生は私の足らざる点を見抜いておられたのだろーと思います。

聴く力を伸ばすには言うまでもないことですが、自分の発音を正しくしなければなりません。正しく発音しないと相手に伝わりません。声調の下がるところを上がったたり、上がるころを下がったりすると意味が分からなくなります。それに自分の発音をいつも耳にしているわけですから、正しくない発音に慣れている耳は人の発音に誤作動してしまうのです。それで発音を正しくすることに書院は非常に重点を置いており、発音教育は徹底していました。1年生の時はそこから始まるわけですからもちろんありますが、上級学年になってもなかなか厳しかったと思います。予科2年の時の坂本一郎先生は発音には特に厳しい先生でございました。坂本先生は神戸市外国語大学の中国語学科を作られた方でございま

す。厳しい先生で、今思い出してもゾッとすることがたくさんございます。中国人の先生が読み上げられたあと、我々は続いて一齐に音読するわけでございます。40名くらいのクラスだったと思いますが、違った発音をしますと坂本先生から時々短いチョークがパツと飛ぶというようなことがございました。それが3人間違えますと3人に飛ぶんですね。そしてそれで終わるならいいんですけども、一齐音読が終わったあと、中国の先生と一緒に、正しい音が出るまでしつこく、と言うと悪いんですけど、本当に繰り返し繰り返し指導された、と言いますか絞られたと言いますか、そういうことがたびたびございました。

書院の発音指導ということで思い出すのは、「書院ガラス」です。「カラス」と言っても鳥ではないんですね。書院では入学しますとまず各自が1年上の同県人の先輩に付きまして、朝食前約1時間、夕食後約1時間(1時間を超えることが多かったですけども)、マン・ツー・マンで発音の指導を受けるということになっておりました。音読指導と言いましても最初の頃はやっぱり発声練習から始まるわけでございますから、先輩のあとに付いて「アア、アア、アア、アア」とか「カア、カア、カア、カア」とかいうようなことを声張り上げてあちこちで言うもんですから、カラスが鳴いているように感じたわけでしょうね。それで「書院ガラス」というように名づけられたわけでございます。書院は全寮制をとっておりましたから、できたのであらうと思いますが、ほぼこの状態が前期の秋の試験が終わる頃まで続いたと思います。これは発音指導もさることながら書院生としての一体感とか、そういったものを養っていったというように感じております。この先輩に付いて朝食前に1時間、夕食後に1時間、大きな声を出して読むというのが習慣になりまして、先輩から離れても自分で「華語萃編」とかその他のテキストを片手にして読みながら、我々が「ユアンズ(院子)」

(庭ですね)と呼んでいたキャンパス内を歩き回っている、そういう光景があっちこっちに見られたものであります。

誰がどの新入生を指導するかは、学生の間で組織されておりました県人会でだいたい決めていたようです。たとえば福岡県出身の人ならば福岡県人の2年生に付いて習う、こういうようになっていました。私はさっきご紹介がございましたように福井の出身でございました。ところが私が入学した時には福井県人の方は在校の先輩にはおられなかったんです。ただ県にゆかりの人では、お母さんが福井県ご出身であるという38期生の方が1人おられました。いろんなところにゆかりをつけていくものだと感心しましたけれども、その方が確か弓道部だったと思いますが、自分の所属する体育クラブの中から予科2年の方を選んで、頼んでいただきました。

その方がちょうど明日から授業が始まるという前の日に部屋に訪ねてきてくださいますして、「明日から始めるぞ。朝起きたら俺の部屋へ来い。寝坊していたら遠慮せずに叩き起こせ」というように言ってくださいました。埼玉ご出身の方で、これが明日から私を教えてくださいと兄さんかと思っでとても頼もしく感じたものでございます。昨年ですか、お亡くなりになりましたけれども、発音の大変きれいな方でございました。中国語にはそり舌音とか、「リ(日)」という巻き舌音ですね、パツと息を出す音、日本語ではたとえば「タタミ」と言う場合に2番目の「タ」はちょっと息が出る、あれよりもっと強い息が出る音がございまして、それがなかなか出ないんですが、根気よくいやな顔ひとつせずにご教えてくださいました。のみならず土曜日・日曜日には街へ連れ出していろいろ案内したりご馳走してくださるなど、本当に兄以上の存在でございました。予科を修了する時に学校から褒賞されました。トップが今そこに座っておられる下村君で、私は3席だったと思うんですけど、その先輩は非常に喜んでくださいました。そ

罵る言葉、それから性に関係した言葉なんていうのは出てこないですね。そういうのを私たちは、彼らから聞きました。中国語の罵語では性のモラルを破壊する、乱すというようなことが中心になっています。そういう言葉とかいろいろなことを彼らからたくさん習いました。私について言えば、清末の花柳界を描いた小説を読む時にずいぶん助かったものです。私はちょうどそういう中日学院の卒業生と予科寮の時に一緒に過ごし、学部寮でも一緒になりました。その関係で、他の人よりもいろんなことを彼らから聞き、学ぶことができました。大変幸せだったと思っています。その中の2つほどをお話してみたいと思います。

2つとも林出賢次郎という方に関わることでございます。この林出賢次郎先生というのは、私たちが在学している頃は学生監、今の日本で言う学生部長のようなお仕事をなさっていた先生でございます。私もよく門限に遅れて、学生課に呼び出され、林出先生のところへ行ったら外出禁止の処分を言い渡されておったものでございますが、先生はニコニコとした温顔なんですね。そんな時でも非常に優しい温和な顔をなさっているんです。口では「外出を禁ずる」と厳しくおっしゃるんですが、目は非常に優しく、ちっとも処分を受けているという気がしない、そういう先生でございました。先生は書院第2期の方でございまして、明治38年、日露戦争の時のご卒業で、卒業とともに外務省の命を受けまして、露清（当時の中国は清と言っていました）国境を単身踏破して、今問題になっています新疆ウイグル自治区のイリまで行かれた方です。後に外務省に入られまして中国語では「北の林出、南の清水」（清水董三氏、書院12期、南京に長く在勤され、犬養健氏の「回顧録」にしばしば登場してきます）と謳われ、いろいろ逸話も多い人だと先輩に聞いておりました。

林出先生が露清国境の探査を終えて日本へお帰りになる、天山山麓を通過している時に、向こうか

ら1台の馬車がやってきてすれ違う、こんなところで、と思ってお互いがフッと後ろを振り返る、そうするとすれ違った馬車が引き返してくる、「林出君ではないか。俺は陸軍の日野少佐だ」。日野少佐というのは陸軍きっての中国通と言われていた方で、中央アジアへ向っていたのでした。そこでどういうふうに着意投合したのか知りませんが、「林出君、俺の娘をもらってくれないか」「じゃあいってください」ということになり、日本へお帰りになってから日野家を訪ねられた。日野家は全然知らないわけですからびっくりした。しかも林出先生は中国満州族の風俗で弁髪だったのです。弁髪の中国人が「お宅の娘をもらい受けることになった者でございます」と行かれたんですから、日野家ではさぞびっくりされたと思いますが、その次が面白いですね。「娘さんは女学校に入ったばかりで、おかげで長いこと待たされたよ」とよくおっしゃっておられたそうでございます。

そういう先生でございまして、中国人の学生に向かって2時間ほどコップ1杯の水で中国語で話をされるというような方でございましたが、その中日学院を出た私のクラスメートの話によりますと、先生は満州国ができてから満州国へ出向され、そして溥儀の御用掛みたいなことをされる、第2回の訪日に随行し、天皇陛下（亡くなられた昭和天皇）にお目にかかった時に、昭和天皇が溥儀皇帝に「お懐かしゅう存じます」と言われたのを、咄嗟に通訳できなくて冷汗を流したというのです。私は話してくれた友人に「何が難しいのか」と言いましたら、「いやあ、これは難しい。俺もあれこれ考えたけれども良い訳が思い浮かばない」と。私はこの時「難しい」という意味がよく分からなかったんです。理解する中国語力が無かったんですね。

今思うとそれは難しさが違うんですね。初対面の挨拶ですから「ハオチュウブチェン（好久不見）」（お久しぶりです）これでもいいわけでしょう

う。それから「懐かしい」というのは「ホワイニエン（懷念）」ですね、「懐かしのメロディー」のことは中国語では「ホワイニエンコーチュ（懷念歌曲）」と言います。「懐かしい」＝「ホワイニエン（懷念）」を何とか工夫すれば表現できるように思われますが、林出先生の立ち往生はそんなレベルの話ではないのです。この挨拶は普通の人のあいだではないんですね。一国の天子が一国の皇帝に対するご挨拶なんです。それでどう訳していいか、林出先生はそこに思い悩まれたのだらうと思います。

林出先生は新疆からお帰りになる時に、今問題になっているウルムチへ立ち寄られるのです。そしてウルムチに滞在している時にそこに駐在している清朝の王族に見込まれて、「ぜひ家の家庭教師になってくれ」と頼まれる、そこで先生は「とにかくいっぺん日本へ帰って外務省に報告しなきゃなりませんから」と日本へ帰られた後、すぐにウルムチへ取って返して2年間そこで家庭教師をされ、そこで先生は宮廷用語を身に付けられるわけです。宮廷というのは、日本もそうだと思いますけれども、今はどうか知りませんが「おとうさま」を「おもうさま」と言うように、普通の社会とは違った言葉づかいをしますところ。その宮廷用語を先生は身に付けられたのです。それもあって溥儀の信任を得られたわけですが、宮廷用語に通じておられるだけにいろいろと訳に思い悩まれ、窮して冷汗を流されたのだらうと思っています。

もう1つ級友から聞いたのに「ブーカンタン（不^フ敢^{カン}当）」という言葉がございます。この「不^フ敢^{カン}当」というのは今は会話であまり用いないようですが、我々の時にはよく使っておりました。人に褒められたり、あるいは好意ある申し出、お誘いとかお招きとか、そういうものを受けた場合に「やあ恐れ入ります」「どういたしまして」と返す挨拶用語なんです。ちょうどその日に授業中その言葉の用法を教わりまして、その時は分かったよ

うな気持ちでおったんですが、夕食が済んで部屋で復習をしている時にどうもまた分からなくなりました。それでたまたま中日学院出のその人が部屋にいたもんですから彼に聞いたら、彼もちょっとどう説明していいかと迷ったんでしょね、しばらく考え込んでいて「ああ、こういう話がある」と話してくれたのはこういうことです。林出賢次郎先生が定年退官されることになって、北京を経て海路日本へ向かわれる。その時に船中の先生に、書院の矢田七太郎学長、愛知大学の第2代目の学長になられました本間先生の前の学長ですけれども、その矢田七太郎学長から、母校の書院の学生監として就任してほしいと要請する電報が入りました。その時林出先生は「浅学非才を恥ず」と返電されたんです。それを伝え聞いた北京在住の邦人連中は、「うーん、これは正に中国語の^{ブーカンタン}不^フ敢^{カン}当だ、さすがに林出さんならではの名言だ」と、しばらくこの話で持ちきりであったということを話してくれました。私もそれが印象深く、^{ブーカン}「不^フ敢^{カン}当」の味わいを非常によく表しているものだと思います。文学作品などを学生に読んでいる時にこの「^{ブーカンタン}不^フ敢^{カン}当」が出ますと、よくこの話を引用しておったものでございます。

我々のクラスにはそういう友人がおりました。しかも彼らが我々の中に入って、我々と一緒に中国語を勉強しながら教えてくれたというのは、非常に我々の、少なくとも私の助けになったと思っています。感謝しております。

41期生も下村さんにお聞きしましたら、予科に入った時には160名ぐらいいて、あとはよそから編入になった者や、病気などの休学で前の期から下りて来た者を合わせて180名近くになったということですが、今では40名を割りました。数年前までは例年全国の41期生会を開いておりましたけれども、もうそれが開けなくなってボツボツ10年近くになろうかと思っています。そういった同窓会を開いた時に一番よく出る話は、皆さんもそうだと思いますがやっぱり恩師にまつわる話ですね。そ

して褒められた時よりも絞られた時の話がよく出るものです。私たちの同期会でも「あの時はパンペンさん（坂本一郎先生のことです。「坂本」は中国音では「パンペン」となりますから）に……、リンムーさん（鈴木先生）にも……」といった話が出ていたものですが、私が一番絞られたのは予科2年の時の坂本先生の授業だったと思います。発音の厳しさはさっきちょっとお話ししましたが、授業のあいだ中国人の先生と我々学生が問答をする、要するによく話をさせようとされるわけですが、その時坂本先生は横で聞いておられまして、我々が使う語彙、語句、それから文法などにも非常によくチェックされていました。いろいろ思い出がありますが、その1つにこういうのがあります。

果物の話の時です。梨のことを、梨は「リー」と発音するので「リー（梨）」だけでいいものを、私は「リーツ（梨子）」と「ツ（子）」を付けたんです。と言うのは、栗は「リーツ（栗子）」、柿は「シーツ（柿子）」と言うものですから、梨も付くだろうと思って「リーツ（梨子）」と言いました。先生はそれを聞きとがめられて、例の甲高い中国語で——坂本先生は中国語をお話しになる時には、日本語を話される時よりも1オクターブ高くなるんです。これには理由があるんです。皆さんの中にも中国語をおやりになる方いらっしゃると思いますが、中国語は高い低いで意味を変えていきますから、最初があまり低いと、高低のとりようがないんです。だからちょっと高めに発音するとうまくいくというわけです——、そのやや甲高い中国語で「お前それどこで聞いたか」とギューギュー油を絞られました。こんなことで油を絞られるなんて私もちょっと意外に思いました。それが頭にありまして、後年毛沢東の著作を読んでいますと、その中に「梨子^{リーツ}」が出てくるんです。何だ俺だけじゃない、毛沢東まで使ってるじゃないかと思いました。今度パンペンさんに会ったら言わなきゃいかんと思ったのですがあとで方言を研究し

ましたら「梨子^{リーツ}」というのは、言うことは言うけれども方言であって、共通語では「梨^{リー}」なんですね。今から思うと坂本先生は、学生の我々が街でいろんな方言を聴いて、我々の言葉が方言交じりになるようなことを非常に恐れておられたんだろうと思います。だからちょっと標準的な北京語から外れるような言葉を使うときつく咎められたんだと思います。親心ですね。私はそれが分からんものですから、あの時はちょっと先生を恨みました。こんなことでみんなの前でこんなに叱られないといかんのかと。やっぱり指導は非常に厳しかったように思います。そして、それは坂本先生のみではございませんでした。

授業中に中国人の先生と日本人の先生と一緒におられるような話をしましたが、書院では中国語の授業は、特殊なものは除きまして中国人の先生と日本人の先生がペアでやられていたんです。これは非常に良かったと思います。僕は学生に「何で中国語の先生になったか」と聞かれて、よく冗談で「楽だろうと思ったから」なんて言っていたのですが、素人目には日本人の先生は本当に楽なんですよ。出欠をとるだけです。肝心な話はみんな中国人の先生がされ、日本人の先生は出欠をとって、時々学生の言葉じりをとらえて「けしからん」と怒っていただいわけですからね。あれで飯が食えたらいいなと、叱られた腹いせに級友と話していたものですが、なかなかどうして、そんなものでないことは言うまでもなく、自分が教師になって思い知りました。書院では入門の時から、授業は中国人の先生のお話を主体にしておりました。発音教育もそうなんです。中国人の先生は発音の模範を示されるだけではなく、発声・発音の要領も中国人の先生が中国語で説明されていました。それを横にいる日本人の先生が時々タイミングを見計らって、たとえば中国人の先生が「ショトウ（舌頭）」と言われると、ご自分の舌を指さされたり、「ツォエ（嘴）」と言われると、黒板に「嘴」と書いてご自分の口を指さされる、そ

ういう授業でした。上級にいくに従って中国人の先生のおっしゃること、中国語でお話しになることがだんだん重きをなしていくということは言うまでもありません。

それから作文もペアで教えておられました。日本人の先生が問題を出す、それを学生が中国語で言う、時には黒板にお前書けと言われて書いたりしますが、それを中国人の先生がその場で添削するというようなやり方でした。意味不明瞭な中国語を言ったり書いたりしますと、中国人の先生は日本人の先生に意味を確かめながら添削してくださいました。今では学生は作文をみんな電子辞書で調べますから、50人いたら50人みんな同じ答えになるそうですね。我々の時には電子辞書はありませんから、「お前どこに行くのか」というのでも「你上哪儿去」、「你去哪里」とか「你到什么地方去」などいろいろ出てきます。このように複数の答えが出ますと、中国人の先生がニュアンスの違いを我々に説明してくださいました。これは思い出しても非常に興味深いものがございます。

それから「モオシエ（黙写）」、今は「ティンシエ（聴写）」とか言いますね。英語の「ディクテーション」です。これも2人一緒でした。その時々トピックを中国人の先生が随筆として書いてこられ、学生に読まれる、それを書き取ってゆく、大変面白い授業でした。その時々のものでし、教科書にない斬新なものがいろいろあつたりしました。日本人の先生は介添役で、時々新しい単語が出るものですから、たとえば「ノンナイ（能耐）」、腕前とか技量というような意味ですが、初めて出てきた新しい単語だとしますと、既習の単語を使って「能力的能、耐久的耐（能力の能、耐久の耐）」という具合にしてヘルプしてくださいました。中国人の先生の作ってこられる随筆が軽妙で味わいがあると同時に、いろんな新しいことを覚えられ、自分の聴く力がだんだん増してくることも実感できて、我々は非常に興味深く聴いて

いたものでございます。

古文・古典は中国人の先生がお1人で担当されておりました。古文を現代文に訳すものです。教材には我々が旧制中学の漢文で習った唐宋八家の文や唐詩を多く取り上げておられました。これは日本人の先生のご意向が働いていたと思います。予備知識があるので、中国語による説明も非常に聞き取り易く、文語と口語の違いもよく分かって、これに非常に興味を持っているクラスメートもありました。

それから日本人の先生が単独で教えられる授業、たとえば先に申し上げました「紅樓夢」とか「兒女英雄伝」の講読ですね、これは日本人の先生がお1人で担当されておりましたが、これも日本語に訳すというよりも、その当時の書き言葉体の話を、話し言葉体に直す、近世語を現代のしゃべくり言葉に直すというような説明の仕方理解させようとしておられたように思います。「兒女英雄伝」は熊野正平先生（後に東京商科大学に行かれた先生です）、それから「紅樓夢」は野崎駿平先生（戦後、東北大学に行かれた先生です）にお習いしましたが、お2人ともそうでした。特に熊野先生のほうはまるで講談を聞いているようで、聞き惚れていたものです。

近年日本でも早い段階から「英語で英語を教える」ことの利点が強調されていますけれども、私はこれを聞きますと、書院時代のことをいろいろ思い出すわけでございます。ご意見はいろいろあると思うんですが、書院の中国の授業というのは学生に最初から中国語をたくさん聞かせ、中国語を話すことができる教育に重点を置いていたと思います。これは書院の特色です。利点もあれば欠点もあるかも知れませんが……。そして書院のこの中国語教育では中国人の先生の果たされていた役割は非常に大きいものがあつたと思います。いつも丹念に準備されてきておられました。私は戦災ですべてを消失したので「華語萃編」のあるクラスメートから譲り受けたんですが、彼は

几帳面な男で、欄外にきちんと中国人の先生が挙げられた用法・用例をメモしているんです。それを見ますと、さっき言ったような、活字にならないような例もやっぱり出ています。たとえば病気でお酒をしばらく止めるというのは「チイチュウ（忌酒）」ですね。ところがその先生は関連していろんな用例を挙げていて、中には「チイファンシ（忌房事）」などがあります。こんなのはテキストに出てきませんよ。辞典にも出てきませんし……。そういうふうに広く用例を集めて、熱心に関心していろんな例を準備してこられたわけです。我々は非常に敬愛していたものです。ただ悲しかったのは、先生に対する敬愛の念が深いだけに、我々が先生の国を侵している、侵略している国の若者であるということ、これにはやっぱり切ない思いをしました。いわば我々は敵国の青年です。それに中国語を教えるということの、先生がたの胸中の葛藤はやはりあったと思うんですね。私がもしそうだったならばと思うと、本当に苦しいものがありました。当時はあまりそういうことを話題にしませんでしたが、それぞれが胸の内にそういう思いをしていたことと思います。先生がたは微塵もそういうことを態度にお示しになりませんでした。しかし、それだけに私たちは苦しい思いをしました。

たった1度こういうことがありました。「秦淮に泊す」という杜牧の詩です。「烟籠寒水月籠沙

夜泊秦淮近酒家 商女不知亡国恨 隔江猶唱後庭花」という詩ですが、これはこういう意味です。「鶯が寒々と流れる川に立ち籠めて、臘月が川辺に霞んでいる。この夜秦淮河のほとりに宿を取ったけれども、そこは酒家（お酒を飲ませる料亭）が立ち並んでいる」。秦淮というのは夜の歓楽街です。「商女は知らず亡国の恨み」。「商女」というのは歌姫です。宴席にはべる芸者衆ですね。「あの芸者たちは国が亡んだ恨みを知らないのだろうか」。「江を隔ててなお唱う後庭花」。「後庭花」というのは国を亡ぼすようになった淫靡な曲のこ

とを言います。「国事多難をよそに、江一つを隔てたここでは亡国の調べをなおも歌っている」。先生は朗読を始められまして、「商女は知らず亡国の恨み」というところで詰まってしまわれたんです。そこで声が途切れて絶句されました。しかしすぐ元に帰って、何事もなかったように朗読を続けられ、続いてこの説明に入っていましたので、多くのクラスメートは気づかなかったようです。ただ私たち前に座っていた3、4名はその時アッと思ったんです。先生の表情が急変したので、気が付いて、何だろうとお互いに顔を見合わせました。それが何であったかは先生の説明を聞いてるあいだに分かってきました。

先生は秦淮の歓楽街の状況を見て国家の衰亡の歴史がまた繰り返されるのではないかとという詩人の思いに触発されて、上海の現況に対する先生の悲しみと憤りがこみあげたのではないかと、このように思いました。当時の上海というのは正にこの詩の通りの秦淮でありました。上海の周辺ではもうすでに共産軍の活動があつて、抵抗運動、反日行動が続いているというのに、上海の街では扇情的な歌がはやり、酒池肉林の生活にふけっている俄大尽などもいました。しかしよく考えてみれば、上海がこのような姿になっているということに我々の祖国は全く無関係ではありません。上海がこのようなことを突き詰めていけば、私たちの祖国に行き当たる。非常に重苦しい気持ちになりまして、早く授業が終わらないかなと思っていました。私たちが書院におりました時にただ1回だけあった悲しい思い出であります。

我々の書院での学生生活はこんな状況であったわけですが、その当時書院で、「中国語大辞典」の編纂が進んでいたんですね。私たち学生はあまり知りませんでした。終戦後何年か経ったあと、新聞報道で知りました。中国側に接収されていた東亜同文書院の中国語辞典編纂用の14万枚のカードが郭沫若氏のご尽力によって今度返還されることになり、そのカードの整理とそれに基づく辞典

作りが、鈴木澤郎先生を中心に愛知大学で始まるという報道で初めて知ったのです。そして愛知大学の「中日大辞典」が発行されまして、私は今もずっと利用いたしておりますが、利用していて強く感じるのは、この辞典は正に日本人が日本人の学習用に作った手作りの辞典であるということです。日本の多くの辞典が、中国人が中国人のために作った漢語辞典の焼き直しと言うと叱られますが、それに近いんです。これに対して愛知大学の「中日大辞典」は日本人の手作りによる、日本人の学習のための辞典なんですね。このことを、例を挙げればたくさんありますが、2つだけお示ししたいと思います。

1つは「ホワチュワン（划拳）」。これはA辞典によりまして「拳を打つ」と書いてある。そして括弧をして「宴席で行なわれる遊びの一種」と書いてあります。どういう拳の打ち方かということ は分かりませんから、これを引いた人はああ日本の狐拳のようなものかと思うかも知れません。もう1つB辞典で見ますとちょっと詳しくなっております。「宴席でのゲームの一種。拳を打つ。」そして参考としてこういう説明が付いております。「2人がそれぞれ任意の数の指を突き出し、同時に1から10までの数を唱え、両方の指の和を当てた方が勝ち、負けた方は酒を飲んだり隠し芸をしたりして興を添える。」では愛知大学の「中日大辞典」のところを見てください。非常に詳しい。拳を打つのは同じですがその打ち方についての説明です。指の示し方が出ていますね。指を出

〔划拳〕 huáquán ①＝〔猜cāi拳〕じゃんけんをする。〔一決定〕じゃんけんできめる。〔一贏yíng了〕じゃんけんに勝った。→〔猜cāi猜猜〕 ②＝〔稿gāo拳〕〔図mù战〕〔宴席で座興をそえるための〕拳(を打つ)：〔划〕は〔啐〕〔拈〕〔豁〕とも書く。打ち方は、双方同時に1から10までの任意の数を唱えながら指で0(にぎりこぶし)で表わすから5までの数をつくって前方に突き出し、唱えた数が両方の指の数の和になった方が勝ち。たとえば、口で〔七巧!〕と言いながら手の方は親指を折って4の数をつくって突き出し、相手が3を出した場合、合わせた数が7となるのでこちらが勝ちとなる。掛け声はまちまちで次のとおりであるが、近ごろ一般には数字だけを唱えることが多い。〔一品高升〕〔一点高升〕〔一定恭单〕〔独dú一个儿〕〔两相好〕〔二家喜〕〔哥儿俩lǐǎohǎo〕〔三星(高)照〕〔三阳开泰〕〔四喜〕〔四季平安〕〔四路进攻〕〔五魁(首)〕〔五魁〕〔六六(大)順〕〔七巧〕〔巧巧巧〕〔八仙〕〔八匹马〕〔八仙过海〕〔九九登高〕〔九九快〕〔九子十成〕〔九連灯〕〔快喝酒〕〔快快快〕〔十全(福)〕〔十全福祿〕〔全福寿〕〔滿福寿〕〔全来到〕〔全来〕→〔酒jiǔ令〕〔打dǎ通关〕〔点diǎn将〕〔开kāi当铺①〕

す場合に0はどう表すかまで書いてある。それから数を唱える場合に、今はそのままズバリと数と言うんです、1とか2とか3とか。しかし清朝の末期、民国の初期の頃の中国人は、6なら「リョウユウタアシュン（六六大順）」、7なら「チイチャオ（七巧）」、8なら「パアシェンクオハイ（八仙過海）」とか唱えるのですが、そこまで詳しく記してあります。

これは何でもないのでございますが、このような説明がないと、中国の当時の文学作品は読めません。ただ「拳を打つ」では何のことか分からない。ジャンケンをするみたいな感じになってしまいます。こういう点は愛知大学の辞典は一味違うんです。これはおそらくこのカードを担当された方の原稿がそうなっていると思うんですね。それを愛知大学でまとめあげてこられた。これは中国の社会に深く入り込んでいる人でなければ書けないことです。愛知大学の辞書にはこういう点があります。こんなことを言いますと、そんな説明は「辞典」でなく「事典」に任せればいいことだとの反撃があるかも知れません。しかし外国の文化に対して「事典」的な説明なくしては、外国語の「辞典」は成り立たないんです。その点、愛知大学の辞典は中国の文化を理解する、そういう方向の、正に日本人が日本人学習者用に作った手作り辞典なのです。

また「辞典」という点について見てみましても、やっぱり愛知大学は非常に優れている点があります。これは私、愛知大学を鼻息して言ってるんじゃないですよ。事実を言ってるんです。「チャイ(拆)」というところを見てください。「1、2、3」と意味が分けてあります。1つは「糊付けなどを

〔拆〕

chāi chē

A) chāi ①(糊付けしたものを)はがす。(縫ったものを)ほどく。〔一封〕開封する。〔一被褥〕ふとんをほどく。②(組立ててあるものを)ほぐす。解体する。組になったものをばらにする。〔一卸xiè零件〕解体して部分品にする。〔一套tào书一成本本儿〕一組の書物を端本にする。③仲を裂く。〔一人家的和气〕他人の仲を裂く。

B) chē chāiの文語音。

「はぐす」「解体する」。3番目に「仲を裂く」と書いてある。3つ挙げております。しかし日本の辞典を見ますと3を挙げてないんです。前2つだけなんです。もちろん説明のしかたは違いますが、基本的には1と2だけ挙げて3は挙げてないんです。親文字のところでは挙げないで、「チャイカイ（拆開）」という見出し語で初めてこの意味を出してくるんです。たとえばAという辞典が1と2で親文字の「拆」の説明をほとんど取り入れたあとに、3の1項目を増やして「仲を裂く」という訳語を示しています。Bという辞典は1、2の区別もなく同じように意味を並べたあとに、もう1つ「引き裂く」を付け加えていますしかし、よく考えてみますとこれはおかしいんです。これでは、「拆開」というのは、「開」というのがあるから「仲を引き裂く」というふうに考えますでしょう、みんな。そうじゃないんです。「拆」にそういう意味があるからこそ「拆開」が「仲を裂く」という意味になるんです。「開」というのは「引き裂く」ことによって間隔が開く、だから「開」なんです。「開」に「引き裂く」意味があるわけじゃありません。これは辞典としては根本的なミスをしているんです。

愛大のはそうでなくして、「拆」という親文字の説明に「仲を裂く」という訳を付ける。これは何でもないと思うかも知れませんが、大変なことです。日本のAという辞典、Bという辞典は1と2だけで済ませている中国の漢語辞典を踏襲しているからそうなるんですが、愛大はそういうことなしに書いてるんですね。これは何でもないようなことだけれども非常に大事なことです。中国語の仕組みを研究していく上で大変なポイントなんです。

そういう点で私は愛大の辞典を引くたびに「ああ、さすが」とか、「やっぱりそうか」というような感じをいつも持っております。もちろん辞典というのはみんな一長一短があるんです。だから1語を取り上げてその優劣を問うというようなこ

とは妥当ではありません。ただ愛知大学の「中日大辞典」にはこういう特色がある、日本人手作りの辞書であるという良さをみんなに認識してほしいということで取り上げたわけで、他意はございません。この点をご理解をいただきたいと思います。愛大の「中日大辞典」がこういう特性を持っていることは、10数万に及ぶカードの特質と、それを整理された愛知大学の中国語のスタッフ、中国語の先生方の見識だと思うんです。この辞典は書院が果たせなかった中国語大辞典の大事業の継承であるとともに、愛知大学の中国語研究の集大成でもあるのです。

なおこの辞典の編纂については、ここにおられる今泉潤太郎先生が若くして、ほとんど愛知大学のご卒業と同時に編纂に関われたのではないかと思います。今泉潤太郎先生は我々の恩師である鈴木擇郎先生のお弟子さんで、したがって私と今泉先生とは同門ということになるわけでございます。この今泉先生を始めとする愛知大学のその他の若い中国語の各先生方のご努力によってずっと改訂が進められまして、さっきお伺いしたところでは、改訂版が年内には出版されるというお話でございます。1日も早い出版を待ち望んでいる次第でございます。泉下に眠る我々の恩師も、どんなにか喜んでおられることだろうと思います。偉業を受け継ぎ、発展させてこられた愛知大学にあらためて深く敬意を表すると同時に、早くこの辞典を出していただくようお願いする次第です。

大きなテーマを掲げながら、実際は老人の懐古談に終わりをまして、大変恐縮に存じております。この機会をお与えいただきました愛知大学東亜同文書院大学記念センターの先生方に深くお礼を申し上げますと同時に、我が母校と縁が繋がる愛知大学の益々のご発展をご祈念申し上げまして、拙い講演を終わりたいと思います。なお本講演会には東京など遠方からお見えいただいた方もございました。改めて御礼申し上げます。長いあいだご清聴いただきましてありがとうございます。これ

で一応終わらせていただきます。

【今泉】 1時間半たっぷり、大変ありがたい、個人的にも本当に興味深いお話を聞かせていただき、ありがとうございました。それでは少し時間が過ぎますので、皆さんのほうから質問とか、同文書院の方々もいらっしゃると思いますので、お話を伺ったりいたしたいと思います。手を挙げていただければマイクをお持ちしますのでよろしく願いいたします。

【高遠】 クンテン（宮田）さん。高遠です。久しぶりに宮田さんにお会いしました同級生です。お話の中に出てきた鈴木先生、坂本先生、あるいは熊野先生、みんな字引を作って、愛大では鈴木先生が今泉先生と共同と言うか、一緒に字引を完成された。熊野先生も、一橋大学に帰られたんですが、やはり字引を作られた。あなたも字引を作っていたらっしゃる。戦後僕らの仲間で中国語をここまで研究した人はないと思った。あなただけです。お話に出てきた鈴木さん、僕らは「リンムーさん」と言っていた。坂本さんも僕らは「バンペンさん」と言って、坂本さんとは言わなかった。熊野さんは「シュンイエ」はちょっと言いにくいから「チョンピン（正平）さん」と。あなたはその仲間だから、これから「クンテンさん」と言いましょう。いやどうもありがとうございました。

【宮田】 私の同期も、1級下の小崎さんもお見えでございますから、書院の関係の話はだいたいお答えできると思います。いずれもずっと滬友会本部とか霞山会に関係しておられた方でいろいろご存じだと思いますから、どうぞ遠慮なくお聞きください。

【今泉】 ごございますか、どうぞ。お差し支えなければお名前をおっしゃってください。

【劉】 愛知大学現代中国学部の劉柏林と申します。先ほど宮田先生の、東亜同文書院の中国語教育についてお話を伺って、本当に勉強になりました。書院の方から私も10数年前に、中国語についての教育というお話を初めて聞かせていただきました。私は今愛知大学現代中国学部で中国語を教えますが、ちょっと先生のお話について2、3お聞きしたいことがあります。1つは当時書院では中国語教育を、今愛知大学では1コマ90分ですが、当時は何分間でしたか。それから週に何コマ（何時間）中国語の授業がありましたか。次に中国語の授業はたとえば今は会話とか文法とかいろいろ科目がありますが、当時はどのような科目がありましたか。そういうことについて教えていただければありがたいです。

【宮田】 書院では講義は90分で行っていましたけれども、語学の授業で90分緊張状態を保つことは不可能です。やっぱり45分から50分というのがせいぜいです。だから語学の授業は、はっきりした記憶はありませんけれども講義の時間とは違ったと思います。外国語は平生と違った頭の使い方をするわけですから45分ぐらいでヘトヘトになります。コマ数はそんなに多くなかったと思いますが、毎日ありました。8コマはあったと思います。科目はさっき今泉先生に当時の成績表を見せていただいたんですが、1部、2部、3部とあります。それが何の科目を指すのかは存じませんが、1回生の時は文法、作文、発音と全部ひっくるめた総合です。2回生の時には文法だけの授業がございました。これは熊野先生がちょうど三省堂から文法の本を出されたことと関係があると思います。近世白話小説の講読とか、尺牘（書簡）文などは独立してありました。

【今泉】 どうぞ。

【伊賀】 昭和38年に愛知大学を卒業いたしました

伊賀と申します。私は「華語萃編」を教科書として、今泉先生に中国語を教えてくださいました。今「中日大辞典」のことについて先生から大変お褒めをいただきまして嬉しく思うんですけれども、もう1つの財産であります東亜同文書院大学編纂の「華語萃編」を、大変ボリュームが多いですし少し古いかも分かりませんが、昔の伝統的な言葉が残っているとのことで、これがそのまま無くなってしまえば大変だと思いますので、少し内容を精選していただいて、何らかの形で書物として残していただくということはできませんでしょうか、ちょっとお訊ねいたします。

【宮田】 ちょっとそれは容易ではありませんね。しかし、私も先生と同意見です。と言うのは今の中国では、社会主義社会になってから一時廃止になった言葉が、礼儀正しい言葉として復活しております。年配の方は今のテキストに出ていない言葉を使います。3、4年前だったと思いますが蘇州大学の学長が日本に見えられまして、電話がかかってきました。「時間が無くてお会いできないが、いつ蘇州にお見えになるか」とお訊ねになりましたので、私いつ頃また蘇州へお伺いしたいと言いましたら、「ウォツァイスウチョウクンホウ（我在蘇州恭候）」。「恭しく待つ」という言葉をお使いになりました。「じゃあ蘇州でお待ちしています」。今の学生なら電子辞書を使って「ウォーツァイスーチョートンチョニー（我在蘇州等着你）」ですよ。「私蘇州であんたを待ってるよ」。上層階級ではそういう敬語がだんだん中国でも復活しています。「華語萃編」の中のこういう言葉は、一時はほとんど無くなりました。私の同級に高田君という毎日新聞の記者がいました。第1回の毎日特派員です。文化大革命の時には文化大革命の報道で上田ボン賞、記者としては大変名誉な表彰を受けましたけれども、当時の中国政府からは睨まれまして国外追放になり、2度と中国の地を踏むことなく終わりました。彼は北京にいた時に、

派遣されている支局の中国人の社員に話していたら、向こうはびっくりして、その言い方はダメだと言う。それで「華語萃編」を示したところ、「これもスーラ、スーラ、スーラ（死了）……」。「死んだ、死んだ、死んだ」。言葉がみんなもう死んでしまっていると言われたそうです。「^{スーラ}死了」と言われた言葉が全部ではございませんが、一部にやはり復活して来ています。中国はそういう社会になりつつあると私は思います。「^{ウォツァイスウチョウクンホウ}我在蘇州恭候」、これもその例です。この言葉は戦後のテキストには出ていませんよ。しかし中国の学長さん連中は使います。だから先生がおっしゃるように、今の中国社会の言葉のあり方を見て、ぜひ愛知大学の方にそういう研究をなさってほしいと思います。安部さんお願いしますよ。

【今泉】 どうでしょう、ご質問ご意見、あるいは同窓の方のお話を。

【安部】 愛知大学現代中国学部の安部です。今、宮田先生から名前を言われたものですから。私は今、中日大辞典編纂所の所長を今泉先生から引き継いでやらしていただいております、もちろん今泉先生は編集主幹という形で今も編集に携わっていただいております。先ほどのお話の中にありましたけれども、今年のお話の中に何とか第3版を出す予定をしております。先ほど宮田先生から非常にお褒めいただき、ますます何かプレッシャーが強くなったなというふうに思っております。逆に、言い訳ではありませんが少し最近の出版のことについて、この機会をお借りしてお話しできたらと思います。前回の増訂第2版が出たのが87年ですので、もうそこから22年の月日が流れております。この間の中国の変化は非常に大きいものがございまして、新しい語彙とか、先ほどの「死んでしまった」というような語彙もたくさん含まれております。そういったものをどのように切って、新しいものを入れるかというのが大き

な問題でして、本の厚さ自体はあれ以上増やすことができないものですから、必ず新しいものを入れるためには古いものを捨てるしかないというところが一番大変な点でございまして、今泉先生始めたくさんの先生方に頭を悩ましていただきまして、何とか愛知大学の「中日大辞典」の特色を残しつつそういうことにどのように対応するかということでこれまでやって参りまして、これを年末に出版すると、いろいろと従来と多少変わった点も出てくるかも知れませんが、そういったことも含めまして、今日ご列席の方々にまたいろいろとご指摘をいただいて、さらにいいものに変えていきたいと思っておりますので、その点ぜひよろしくお願いいたします。宮田先生にもまた新しい辞書を贈らせていただきますので、ぜひご覧いただいていろいろとご指摘をいただければというふうに思っております。今日は本当にありがとうございました。

【宮田】 戦後日本で何種類かの中国語辞典が出版されましたけれども、改訂版が出た辞書はございません。辞書の改訂というのは辞書の編纂よりも難しいのです。そうですね、今泉先生。だからこの改訂を2回やられるというのは大変なエネルギーですよ。これはやっぱり愛大がいかに犠牲を払っているか。先生方は教える以外に辞典の編纂をやっているわけですから、相当なエネルギーを使っておられるわけです。2回も30年のあいだにやられるということはこれはもう大変なことです。ご成功をお祈りして止みません。

【今泉】 その他ございませんか。

【大島】 愛知大学東亜同文書院大学記念センターの客員研究員をしております大島隆雄と申します。私は中国語の教師でもなければ本日のご講演の趣旨から少し離れた質問になりますので遠慮させていただいておったんですけれども、ちょっ

と時間があるようですので2つほど質問させていただきたいと思います。私は東亜同文書院から愛知大学にどう発展していくかということを中心にささやかな研究をしている者なんですが、先生がちょうど東亜同文書院大学の第2期生であることと関連いたしまして1つ質問がございしますが、当時東亜同文書院大学内で学生の中で学風論争というのが行なわれたということが「東亜同文書院大学史」に出て参ります。1つは「実学派」と言われるものと、もう1つは「アカデミー派」と言われるもの。そしてそのアカデミー派の学生に、いわばかつがれたと言いますか、彼らの精神的な支持者になられたのが本間先生であるという記述も見られます。その本間先生が最後は学長として復帰されること、そして愛知大学の創立に中心的な役割を果たされることとの流れで、この学風論争ということに注目しておるんですが、実学派と言われる学生達と、アカデミー派と言われる学生のあいだには、はっきりとしてはいないけれども何らかの思想傾向の、あるいはもっと言えば政治的傾向の相違というものが見られましたでしょうか。たとえばアカデミー派というのは非常にリベラルな人達が多かったとか、実学派というのは当時の日本が進めております中国への戦争、そういったものに割と肯定的であったとか、そういう思想的な傾向が見られたかどうか、先生はどういうふうにご判断になられているのかお聞かせ願いたいということが第1点でございします。

第2点は、これはこのあいだ私が講演した時の1つの議論の対象になったのですが、愛知大学は現在東亜同文書院大学の後継大学と自称しているんですけれども、東亜同文書院大学の卒業生、滬友会の中にはかなり大きな力をもって愛知大学を東亜同文書院の後継大学とは認めないというご意見が一時強かったんですね。詳しいことは言いませんが。先生は東亜同文書院を少し早めにご卒業になって、中国で敗戦を迎えられて日本に帰国されたんですが、愛知大学に來られて中国語の先生

になられたわけではなくて、しばらくは福井県で語学教員になって、後に大阪市立大学その他の大学で活動なさるんですけれども、帰国直後愛知大学が創立される頃福井県におられまして、愛知大学についてどういうふうにお感じになられたのか。本間先生あるいは小岩井先生らが作る後継大学ができたというふうに感じられたのか、それとも京城大学や台北帝大などの先生と一緒にあって新しい大学ができて、どことなく東亜同文書院大学とは違った大学ができたんだと感じられたのか、その辺の率直なところを、今日は愛大で講演をなさっておられるからと遠慮なさる必要は何もございませんのですが、その辺愛知大学の創立を素直な後継大学の出現と見られたのか、それとも本間さんあるいは小岩井さんが作られたかも知れないがちょっと東亜同文書院とは違った大学ができたんじゃないかと思われたのか、その辺のことを。ちょっと微妙な質問をさせていただいて失礼なんですけれども、実はこの問題を私、研究しているので、率直にお答えいただきますと大変嬉しいですよ。

【宮田】 はい。第1点でございますが、これは1つ小崎さんらのお考えを伺ってみましょう。アカデミック派がリベラルで戦争反対であると、それから実務派は体制容認で中国侵略容認であるというような明確なものはなかったように思っておりますけれどもね。それから我々学生はそういうことを討論したことはないですね。後からどなたかがお書きになったことであって、学生のあいだには、少なくとも我々の周囲には無かったと思っております。どうでしょうか、下村さん。

【下村】 そうですね、私自身の感じとしては、商務科が4年生、我々大学の1年で1期生、2期生で予科になり学部ができたでしょう。その違いで、いわゆる従来の先輩達はどちらかと言うと実務派だったと。我々は大学になって予科、学部で

いくんですから、もう少しアカデミックに取り組まなきゃいけないというような気持ちであって、仲間のあいだにアカデミー派だとか実務派だとか、そういう区別は全くなかったような気がしますけどね。

【宮田】 私もそう思うんですけれども。小崎さんいかがでしょう、期がちょっと違いますか。

【小崎】 私もそう思います。強いて分けるとなると非常に難しい。そういう分け方は後の人がいろいろ想像して、後世の学者と言うかそういう方々が考えられたことじゃないかと思うんですが。我々がおった当時は全くそういうことは考えなかったです。我々の入った運動部にはそういうことはなかったですね。運動部じゃなくて音楽部だとか、座禅をやった部だとか、YMCA だとか、それから禅をやった尚志会、そういうものの中ではあり得たかも知れませんが、まあ私は無かったと思いますね。

【宮田】 高遠さんどうでしょうか。

【高遠】 私も同じような意見です。

【小崎】 後世と言うか、後の人がいろんなことを言うんでしょうけれども、我々の中ではそういう区別は無かった。

【宮田】 学生のあいだでは無かったと思います。

【小崎】 後からそういうことを作文しているんじゃないかな。ありませんでしたね。

【宮田】 それから第2点です。愛知大学ができた時に我々がどう見ていたかということでございますが、率直に言いまして私はやはり別個の大学ができたというような感じがしておりました。それ

からその後の愛大にいろんな事件が起きました。金丸一夫さんたちがやった、例の愛大事件などがありましたね。そのころの愛大を見てやっぱりちょっと我々が考えている大学とは違う、書院とは関係のない方向に愛大は進んでいるなというのが正直なところ我々の実感でした。

【今泉】 それではまだあるかも分かりませんが、ちょうど時間になりましたので、改めて講師の宮田先生に拍手でお礼を申し上げたいと思います。先生どうも本日はありがとうございました

宮田一郎（東亜同文書院大学41期生）

1923年福井市に生まれる。福井県費生として東亜同文書院大学入学。学徒出陣で応召。終戦により現地除隊。

帰国後、福井県立高校に勤務のかたわら、中国語学の研究をすすめ、福井大学で永らく中国語を教え、のち大阪市立大学教授となる。その後、大東文化大学、京都外国語大学、北陸大学各教授を歴任。この間8年にわたりNHKテレビ、ラジオ中国語講座を担当。

「漢語方言大詞典」、「明清呉語詞典」を復旦大学、蘇州大学と共同編集し、現在両大学の顧問教授。その他多数の中国語辞典を編著。

愛知大学東亜同文書院大学記念センター

公開講演会

「東亜同文書院大学の教育とくに中国語教育について」

日時 2009年7月25日(土) 14:00～16:00

会場 愛知大学豊橋校舎 本館5階会議室
※豊橋鉄道渥美線「愛知大学前」駅 下車すぐ

講師 **宮田 一郎** 復旦大学顧問教授
蘇州大学顧問教授
(東亜同文書院大学41期生)

東亜同文書院大学41期生の宮田氏が書院で見た、皇宮御儀への天皇のお言葉「お懐かしゅう存じます」の通訳に際して冷や汗を流した林市賢次郎や、「商女不知亡國恨」のところで暗に絡めた中国人の顔などのエピソードを回想しながら、ご自身が経験した中国語教育について語る。

入場無料 どなたでも自由に
ご参加ください。

お問い合わせ
愛知大学東亜同文書院大学記念センター/オープン・リサーチ・センター
〒441-8532 愛知県豊橋市明地町1-1 TEL (0532) 47-4139 FAX (0532) 47-4198
愛知大学豊橋研究支援課 E-mail:rsrien@aichi-u.ac.jp